

タイトル	非物質文化遺産の保護・伝承と観光開発のインタラクションに関する考察：中国雲南省麗江市におけるトンパ文字・典籍の事例を通じて
著者	蔣，蕾；伊藤，昭男
引用	北海商科大学論集，4・5：1-25
発行日	2016-02

非物質文化遺産の保護・伝承と観光開発のインタラクションに関する考察
—中国雲南省麗江市におけるトンパ文字・典籍の事例を通じて—

A Study of interaction between the protection and inheritance of
non-material cultural heritage and tourism development : Through the case
of Dongba characters & ancient books at Lijiang, Yunnan Province, China

蒋蕾 Jiang, Lei 伊藤昭男 Ito, Akio

要旨

本稿では非物質文化遺産と観光開発とのインタラクションにおける課題を中国雲南省麗江市のトンパ文字・典籍の保護・伝承と観光開発の事例を通じて考察した。この事例より、非物質文化遺産の保護・伝承と観光開発の間には、大きく分けて良好と不良の2つのインタラクションが存在することおよび、不良なインタラクションが発生する原因連鎖を明らかにした。その上で、不良なインタラクションを良好なインタラクションへと転換し、持続的観光開発へと推進するためには、非物質文化遺産の保護・伝承システムの強化だけでなく、それを支援するシステムの整備が同時に必要であることを明らかにした。

Abstract

This paper considers the subjects of interaction between non-material cultural heritage and tourism development through the case of the protection and inheritance between non-material cultural heritage and tourism development in Lijiang, Yunnan Province, China. It is clear that there are good interaction and bad interaction, and the mechanism of caused chain that occur the bad interaction. Moreover, it is clear that the promotion of sustainable tourism by the conversion from bad interaction to good interaction is necessary to execute simultaneously not only the strength of the system of protection and inheritance of non-material cultural heritage but also the construction of supporting system about it.

キーワード：非物質文化遺産、観光開発、インタラクション、トンパ文字・典籍、麗江、中国

Keywords : non-material cultural heritage , tourism development, interaction, Dongba character& ancient books, Lijiang , China

1. はじめに

1.1 研究目的

現在、発展途上諸国を含め多くの国で、観光ビジネスは外貨獲得、雇用機会、所得の増大、地域振興などの手段として注目されている。観光の対象となるのは、その土地その場所の自然景観、歴史的な建造物、民族文化や芸能・歌舞であったりと様々である。とりわけ保護・保全が重視される UNESCO の世界遺産に登録された遺跡、建築物、自然景観は、中国も含めた各国で観光開発のための貴重な観光資源となっている。また世界遺産の中でも民族文化などの非物質文化遺産もまたその固有性、不復元性などの特徴によって文化の保護・保全と同時に観光開発と密接な関係を有している。そこでの関係性とは、単に非物質文化遺産が観光資源として観光開発に活用されるという関係性だけでなく、逆に観光開発の推進によって非物質文化遺産の保護・保全が促進されるという両方向の関係性が存在するということである。問題はそうした両方向の関係性の存在を確認すること、また望ましい関係性（両立可能性）へと導くためにいかなる方策を実行すべきかである。これまでこうした問題意識に立って具体的に非物質文化遺産と観光開発との両立可能性を考察した研究はそれほど多くはない。本稿の研究目的は、非物質文化遺産の特に保護・伝承と観光開発との関係性を具体的な地域事例を通じて考察し、その両立可能性のための方策を見出すことにある。

1.2 考察対象の地域と非物質文化遺産の限定

本稿の考察対象地域は中国雲南省麗江市とする。雲南省は中国の西南部に位置し、人口約 4,000 万人の内、およそ 3 分の 1 が少数民族と言われ、25 の少数民族が村を形成している¹⁾。雲南省における観光開発は、他省とほぼ同じく、改革開放政策開始直後の 1978 年に始められた。中でも麗江市は、1990 年代以降に本格的に開発された中国の観光地の中で最も成功した一つといわれている。麗江旧市街は、1996 年に発生した麗江大地震の状況が中国全土に放映されたことや、1997 年に纳西族の文化と共に世界文化遺産に登録されたことによって、中国における観光地の価値づけに大きく成功した。また、2003 年には世界で唯一使用されている象形文字であるトンパ文字²⁾が世界非物質文化遺産に登録された。麗江は「地球で最も観光に値するトップ 100 の町」や、国際連合の「世界の都市で最も居住性が優れた町」などと呼ばれている。2012 年には、麗江市古城区の国内外観光客入込み人数は 1 億 1,001 万 1,800 人となり、旅行総収入は 132 億 8,800 万元となった。麗江は遺産保護と観光発展の双方で顕著な成果を上げ、2001 年 10 月に麗江で開催された UNESCO 文化遺産管理第 5 回年会において「UNESCO アジア・太平洋地域持続的な文化観光発展麗江合作モデル（「麗江モデル」と略称される）」と命名された。「ある民族あるいは地域の無形的な歴史、民俗、文化などをビジネスに活かして、多数な観光客を呼び込んでいることこそが麗江の魅力だ」と言う人もいる³⁾。麗江市政府も麗江の非物質文化遺産であるトンパ文化を観光産業の「核」とみなし、トンパ文化産業の発展が新たな経済発展の源となることを強く主張するようになった。本稿では考察対象とする非物質的文化遺産をトンパ文化の

根幹であるトンパ文字・典籍とする。トンパ教に由来する命名であるトンパ文化は、主にトンパ文字・トンパ典籍・トンパ画・トンパ音楽・トンパ舞踊・トンパ祭祀儀式などから合成される。その中で、トンパ文字は、ナシ族特有の象形文字であり、世界唯一の生きている象形文字と言われ1400余の字形を有する。幾多の紆余曲折の歴史の中で多くを損失したものの、トンパ文字で作成された古代ナシ族の「百科事典」とも言える宗教典籍「トンパ典籍」が継承されており、それらは2003年にUNESCOの世界の記憶事業に登録された。トンパ典籍はナシ族トンパ文化の主要な知識伝達手段であり、歴代のトンパがトンパ文字で記録した宗教祭司、占いの記録、その他関係資料を、長い時間において加工・整理して作られたものであり、その内容はナシ族古代の社会形態、民族歴史、原始信仰、宗教哲学、科学技術等様々な内容にわたる。このようにトンパ文化の保護と伝承においてはトンパ文字・典籍こそが「核」となる要素である。

1.3 関連研究のサーベイ

トンパ文字・典籍と観光開発に関する先行研究を整理したのが表1である。それらは各文献の研究視点および内容から4つのグループに分類・整理しうる。

表1 麗江のトンパ文字・典籍と観光開発に関わる先行研究文献の分類・整理

グループ	研究視点	文献
a	トンパ文字文化と観光開発	楊傑宏(2013)、王声躍・嚴舒紅(2001)、楊世英・楊世榮(2014)
b	トンパ文字文化の伝承・教育	和繼全(2012)、李四玉(2014)、楊傑広・張玉琴(2009)、胡迪雅(2013)、和力民(2004)
c	非物質文化遺産と観光開発	趙悦・石美玉(2013)、李剛(2014)、徐文燕(2010)、顔明霞(2014)
d	a、b、cの包含	高茜(2005)、Huibin et. al.(2012)

ここで「aグループ」は、トンパ典籍と観光開発の関係性に関わる視点を含んだ先行研究である。楊傑宏(2013)は麗江の観光産業の発展と、トンパ文化が観光の発展によってどのように変化したかについて言及している。具体的には、トンパ文化が伝統文化資源から経済資源に転換するとき、トンパ文化の民俗機能も変わり、さまざまなトンパ商品とトンパ歌舞はほとんど利益重視となってしまった。また、観光商品としてのトンパ文化は観光客の観光動機を生じさせるものに変ったとしている。王声躍・嚴舒紅(2001)は、トンパ文化観光の開発においては参与性の原則、持続的発展の原則、長期利益の原則、適度な開発の原則、総合的な原則に従うべきだと主張する。楊世英・楊世榮(2014)は、学校クラスでの伝承はある程度限界があるため、学校クラスの伝承よりは観光産業活動の中で伝

承したほうが良いと提案している。具体的には、ガイドにトンパ文化を教えること、伝統的な祝日や観光商品を通してトンパ文化を伝承すること、ナシ文化を感じさせる映画の製作など映像文化を通してトンパ文化を伝承するという3つの方法を示している。

「b グループ」は、トンパ文字文化の伝承・教育に関する先行研究である。和継全(2012)は、トンパ典籍の教学伝承は、これまでの家庭伝承、徒弟伝承を主とする民間自然伝承モデルではもはや十分ではないとの認識から、クラスによる典籍教学伝承方式である3モデル(郷土文化授業モデル、民間中心モデル、大学院生モデル)がトンパ文字伝承の有効な手段であるとし、それらについての考察から現在のトンパ典籍教学伝承が直面している大きな問題として長期学習を続けるための制度の創設、教員の養成、教材の作成を指摘している。李四玉(2014)は、トンパ文化の伝承機能には5つの機能(教育機能、心理的機能、社会的整合機能、適応機能、凝集機能)があること、また、トンパ文化の伝承モデルはすでに郷土の社会文化のみではなく、現代の市場文化と連結した新たな3つの伝承モデル(政府主導で学者が関与する学校伝承モデル、企業が主催し学者が指導する文化産業伝承モデル、村が自主的に形成した民間伝承基地において行う民間伝承モデル)となっていることを指摘している。その上で、社会の変化によって教育機能と心理的機能の弱体化、社会的整合機能、適応機能、凝集機能の移り変わりが見られると言及している。楊傑宏・張玉琴(2009)は、トンパ文化の保護と伝承の現状を調査・把握した上で、今後の対応戦略として①国家級のナシ族文化生態保護区の上申、②トンパ文化の保護・伝承制度の強化、③トンパ文化の保護と伝承のための基金会の設立、④人材育成戦略の確実な実行と体系化を提議している。胡迪雅(2013)は、トンパ文化の伝承メカニズムと国家主導による学校教育には矛盾するインタラクションが存在すると指摘する。すなわち学校教育の文化伝承では、自分自身の発展や競争力に役立つと考えられる主流文化を選ぶことになり、伝統文化を継承する者が減少していくことになる。それ故、学校教育、特にその評価制度においては民族文化を重視すべきと提案している。和力民(2004)は、トンパ文化の伝承はレベルとタイプによって多様に伝承しなければならないと提案している。トンパ教を信仰し、トンパ祭司儀式を行う地域の伝承者は、一級伝承者として専門的に養成していく必要がある。政府と研究部門及び文化産業部門さらに観光産業とを結ぶ者は二級伝承者としてトンパ文化の学習と観光サービスとを結びつけていく必要がある。第三級伝承者は、文化・教育部門あるいは民間による自発的、短期的、一時的にトンパ伝承を行う者として対応していく必要があると主張している。

「c グループ」は、非物質文化遺産と観光開発についての先行研究である。趙悦・石美玉(2013)は、非物質文化遺産と観光開発との間には「非物質文化遺産の保護と観光開発の間の矛盾」、「開発主体間の矛盾」、「利害関係者間の矛盾」の3つの大きな矛盾が存在すると指摘した上で、非物質文化遺産の開発においては、これらの矛盾をできるだけ大きなものにならないように配慮した開発が必要であると共に、文化を伝承する人材をいかに形成していくかが核心であることを主張している。李剛(2014)は、非物質文化遺産と観光開発の間にはインタラクションがあり、協力と競争もある。観光開発は非物質文化遺産の

保護と伝承に役に立つが、不適當または過度な開発は非物質文化遺産の価値と文化意義を壊す可能性がある。「科学的な観光開発と持続可能な非物質文化遺産保護のモデル」こそが、最も良い開発方法であると提案している。徐文燕(2010)は、現在、国内外で観光開発と非物質文化遺産をどのようにお互いに促進するかということがテーマになっているが、中国内の学者は観光開発を保護の敵と見なし、両方の矛盾を強調している傾向があるのに対し、海外の学者は保護性・特徴性・参与性・持続性と真正性などの原則を守る開発を行うのであれば、非物質文化遺産には高い審美・文化・科学などの価値と特殊な吸引力があり、互いに良好に作用すると考える傾向があることを指摘している。顔明霞(2014)は、非物質文化遺産保護と観光資源開発との間には2つのインタラクション・モデルがあるとし、一つは、観光資源開発によって非物質文化遺産の保護を図っていくモデル、他の一つは非物質文化遺産の保護を図りつつ、観光資源開発を図るモデルであると指摘している。

「dグループ」は、a、b、cの各グループとも係わりをもつ総合的な内容の研究文献である。高茜(2005)は、麗江ナシ族において本来、宗教祭祀だけのものであったトンパ文字の衰退、再開、保護、政策転換といった歴史的な変遷を、1990年以降を中心に概観し、トンパ文字の伝承活動が有する少数民族政策上の意義を考察している。Huibin et. al.(2012)は、文化遺産観光の保護と発展について麗江を事例に考察しており、観光地ライフサイクル・モデルにおいて、麗江の観光開発段階は開発と統合の間にあるとの認識から、今後の文化遺産観光の保護と発展のためには、多様な手段を用いた効果的な支援、多様なステークホルダーの積極的な参加・協力、各種の利益・権力・資源・文化等のバランス調整が必要であることを主張している。

2. 非物質的文化遗产の保護の枠組み

2.1 UNESCOによる枠組み

非物質文化遺産は生きている記憶と言われ、文化価値、精神価値、芸術価値、娯楽価値、経済価値、社会価値等様々な価値を有している。しかしながら、一旦壊れたら回復できないという復元不可能性の性質を有している。こうしたことから、非物質文化遺産の保護と伝承は、非物質文化遺産に関する研究の最も根本的な課題である。「非物質文化遺産の保護に関する条約(以下、非物質文化遺産保護条約)」は、2003年10月のUNESCO総会において採択され、2006年4月に発効した。本条約において「非物質文化遺産とは慣習、描写、表現、知識及び技術並びにそれらに関連する器具、物品、加工品および文化的空間であって、社会、集団及び場合によっては個人が自己の文化遺産の一部として認めるもの」と定義されている。非物質文化遺産は、芸能(民族音楽・ダンス・劇など)、伝承、社会的慣習、儀式、祭礼、伝統工芸技術、文化空間などが対象である。有形の文化遺産については既に1972年に採択された「世界の文化遺産及び自然遺産の保護に関する条約」(世界遺産条約)により、世界遺産をリストアップするなどの保護の枠組みが整えられていたが、非物質文化遺産についてはその枠組みで保護することが難しかったため、新たな枠組みが作られた。非物質文化遺産の保護に関する条約は、締約国が30か国に達した時点から3か

月後に発効する規定となっており、採択されてから約3年後の2006年4月20日に発効した。

UNESCOでは、非物質文化遺産の保護に関する条約の発効に先立ち、隔年で「人類の口承及び無形遺産の傑作の宣言」(傑作宣言)として発表していた。隔年で3回行われ(2001年、2003年、2005年)、計90件が傑作宣言された。これらは非物質文化遺産の保護に関する条約の発効後に代表一覧表に統合され、その後の宣言は行われていない。2007年9月には、代表一覧表や「緊急に保護する必要がある非物質文化遺産の一覧表」(危機一覧表)などの作成について協議する場としてUNESCOの第2回政府間委員会が日本で開催された。この委員会では、第1回の一覧表作成を2009年9月に行うことで各国政府代表が合意し、2008年6月に開催されたUNESCO総会で正式に決定された。なお、代表一覧表への各締約国の提案提出期限については、第1回は2008年9月末であった。ちなみに、危機一覧表は2009年3月15日である。第2回目以降は、代表一覧表への提出期限は毎年8月末とされている。2011年まで世界で136カ国が締約しており、日本は平成2004年6月に世界3番目に締結したが、中国は2004年8月に『非物質文化遺産保護公約』を締結している⁴⁾。

2.2 中国政府による政策の経緯

グローバル化が進展する中で、諸民族の伝統文化を保護する機運は中国政府においても高まり、2004年には『非物質文化遺産保護公約』を締結した。また、2011年2月25日には第十一期全国人民代表大会常務委員会第十九回会議において『中華人民共和国非物質文化遺産法』を可決した。また、中華民族の優秀な伝統文化を継承、拡大し、社会主義精神文明の建設を促進し、非物質文化遺産の保護、保存を強化するためとして『中華人民共和国非物質文化遺産法：以下、遺産法』を制定した。『遺産法』内には、「国は、非物質文化遺産に対して認定、記録、登記等の措置をもって保存し、中華民族の優秀な伝統文化を体現し、歴史的、文化的、芸術的、科学的価値を有する非物質文化遺産に対して伝承、伝播等の措置をもって保護する。非物質文化遺産に対する保護は、その真実性、全体性と伝承性を重要視し、中華民族の文化的アイデンティティの強化、国家統一と民族団結の擁護、社会の調和と持続可能な発展の促進に有益である。非物質文化遺産を使用するとき、その形式と内容を尊重しなければならない、歪曲、貶し等の方式による非物質文化遺産の使用を禁止する」との記述がある。加えて、中共中央十七届六中全会では「关于深化文化体制改革推动社会主义文化大发展大繁荣若干重大问题的决定：以下、决定」を通過させた。この「决定」は優秀な伝統文化継承システムを建設していくことを表明したものである。「决定」の中には、「優秀な伝統文化は中華民族の精神追求と歴史の精神財富を凝集して、社会主義先進文化を発展させる基礎であり、中華民族の精神家園を建設する重要な支えである」「少数民族の文化事業を繁荣发展すべきであり、少数民族特色な文化を保護する仕事を展開する」などが主張されている。

以上のように中国政府は非物質文化遺産を非常に重視しており、政府の政策の推進によ

って学術団体および社会の各方面においても、「中国民族民間文芸集成志書」の作成、「中国民族民間文化保護プロジェクト」や「少数民族文化遺産と文化生態区」創設による保護の強化など、非物質文化遺産の保護が進められている。

3. トンパ文字・典籍の保護・伝承状況

3.1 トンパ文字・典籍の保護に関する歴史的経緯

考察対象非物質文化遺産であるトンパ文字・典籍保護・伝承の歴史的経緯を整理したのが表 2 である。トンパ文字・典籍の伝承活動は中国人民共和国の成立やその後の文化大革命などの様々な影響を受け一時は断絶をも余儀なくされる事態となったが、それを憂慮する復興に向けた動きから下記のように学校教育を含めたトンパ文字・典籍に係る保護・伝承運動が展開されている。

表 2 トンパ文字・典籍の保護・伝承に関する歴史的経緯

1981年	麗江トンパ研究室が設立。
1982年	麗江トンパ博物館が設立。
1995年	麗江トンパ博物館によるトンパ文化学校の創立。 塔城郷署明村でトンパ文化学校が設立 ⁵⁾ 。
1998年	迪慶州唯一のナシ族郷でトンパ文化の発祥地である三坝白地に汝卡通ンパ学校が設立。
1999年	ナシ族学者郭大烈とその夫人(黄琳娜)によるナシ・トンパ伝習院が黄山小学校と協力してトンパ文化伝承クラスを創立。 麗江トンパ文化研究所によるトンパ後継者学習クラスが設立。 麗江玉水寨観光会社によるトンパ文化伝承基地が設立。
2001年	麗江県人民代表大会による『雲南省麗江納西族自治県東巴文化保護条例』が通過。
2002年	麗江と雲南民族大学の協力による「ナシ族言葉とトンパ文化」の大学課程が始まる。
2003年	麗江県人民代表大会常務委員会による『関与在全県小学校教育中開設納西語言伝承和普及教育的決議』が通過し、2003年、2004年、2007年の夏休みにナシ語のクラス教育が行なわれる。 麗江玉水寨観光会社による麗江市納西東巴文化伝承協会が創設。
2005年	雲南省人民代表大会において『雲南省納西族自治県東巴文化保護条例』が通過。
2008年	麗江市による一般市民向けトンパ文化保護伝承強化クラスが始まる。

出所：楊傑宏・張玉琴(2009)、高茜(2005)より作成。

3.2 伝承モデルの類型化と教学状況

トンパ文字・典籍を含めたトンパ文化の伝承方式にはいくつかのパターンが存在するが、それに関して和継全(2014)と李四玉(2014)はそれぞれ類型化を行っており、それをまとめたものが表3である。これよりトンパ文化の伝承方式を和継全は「小学生」「民間人」「大学院生」といった対象者の観点から類型化しているのに対して、李四玉はトンパ文化

の伝承はすでに郷土社会文化ではなく現代市場文化と連結しているとの見方から、「政府」「企業」「村」といった実施主体の観点から類型化を考えている。伝承運動の広がりに伴って伝承方式はより多様となることも予想されるが、伝承者としてどのような者を対象とし、どのような組織が主体となって伝承を行うかは今後の伝承システムを考える上で引き続き重要な視点であろう。

表3 トンパ文化の伝承モデルに関する類型化

文献	伝承モデルの類型	内 容	特徴
和継全 (2012)	① 郷土文化授業モデル	① 現代の小学校クラスでトンパ典籍を学ぶというモデルである。ナシ族研究の第一人者である郭大烈、黄琳琳が創立した麗江トンパ文化伝習院によって提唱された。最初は黄山小学校で実験したが、後は麗江白沙小学校、南溪小学校などに広がっている。	対象者の観点からみた類型化
	② 民間中心モデル	② ナシ族の民間人にトンパ文化を伝承することを主目的としたモデルである。多くがトンパの後裔で、ある程度の基礎を有し、勉強熱心でもある。	
	③ 大学院生教育モデル	③ 主に西南大学漢言語文献研究所でおこなっている。主要な目的は少数民族の言葉を聴き、記録し、翻訳する能力を高めることである。	
李四玉 (2014)	① 政府主導、学者参与の学校伝承モデル	① トンパ祭司の後継者を培うことではなく、トンパ文化を民族伝統文化として普及することを目的としたものである。幼稚園—小学校—中学校—大学の人材教育システムが該当する。	実施主体の観点からみた類型化
	② 企業主催、学者指導の文化産業伝承モデル	② 観光企業とトンパ伝承を結びつけお互いを促進する、また好循環を生み出そうとするもの。例えば文化伝承の試験を合格した者を企業に雇用し、企業内のトンパ文化伝承に関する中堅メンバーとしていく。	
	③ 村自主的民間伝承モデル	③ 村が自主的にトンパ文化伝承基地を作り、総合的なトンパ文化を担う人材を育成することを目的としたもの。政府関係部門も重視する伝承モデル。	

出所：和継全（2012）、李四玉(2014)より作成。

次いでトンパ文化伝承の内、トンパ文字・典籍に関する主要拠点を示したのが表4である。

表4 トンパ文字・典籍伝承の主要拠点

拠点名	教学等の内容
麗江黄山小学校	麗江東巴文化伝習院と1999年9月より伝承を開始。伝習クラスは3年生以上。第一段階は基本トンパ文字の理解、第二段階は『創世記』の概要を理解、第三段階は『創世記』の要点理解。
麗江東巴文化学校	2002年に全日制のクラスを開設。トンパ文字・典籍のほか、トンパ儀式、トンパ工芸、トンパ舞踊、ナシ族史、トンパ文化概論等のカリキュラムによって伝習。
西南大学漢語言文献研究所	トンパ文字に関する大学院修士課程を開設。大学院生向けに木版画の祈祷文、経書のあとがき、トンパ典籍の背景に関する文化知識、筆記、経典経書『点油灯』などを教育。
華東師範大学中国文字応用センター	トンパ文字学に関する大学院修士課程および博士課程での教育を実施している。
麗江玉水寨生態文化旅游有限公司	『纳西東巴古籍訳注全集』を教材にトンパ文字のほか、祭祀儀式、トンパ古籍、トンパ舞踊、トンパ音楽、トンパ絵画、トンパ彫刻、トンパ民族の祝祭日などを学習内容としている。

資料：和継全（2012）、李四玉（2014）より作成。

3.3 トンパ文字・典籍教学伝承が直面している問題

グローバル化、市場化、現代化時代の言語環境に直面して伝統文化は日増しに伝承危機に直面しており、民族伝統文化の伝承を家庭血縁伝承と師弟伝承を主とした民間自然伝承を中心に行うことはもはや困難である。ナシ語は20世紀50年代以前、雲南省麗江において通用したコミュニケーション言語であり、トンパ文化を伝承する最も主要な手段およびメディアである。しかし、社会の発展に伴い、現在、多くのナシ族、特に子供たちはナシ語が話せなくなっている。調査によると、麗江古城白馬龍潭小学校は960名の学生の内、ナシ族の学生は570名と60%を占めるが、ナシ語を話せる学生は110名と20%弱であるという⁶⁾。また、トンパ教がナシ族の地域で益々衰退していること、トンパ文字は成熟した文字ではなくトンパ典籍文献の単語対応がそれほど厳密ではなく古語も多いことなどによって、トンパ典籍文献の伝承を担う後継者がいなくなっているという苦しい状況に直面している。麗江市トンパ伝承院の統計では、1999年に第一回国際トンパ文化芸術祭が開催された際にトンパは80人であったものが、2003年第二回国際トンパ文化芸術祭の際には11人であったという。2009年には4人であるという⁷⁾。

トンパ文化・典籍の教学伝承が直面している問題はその背景を含めて次のように整理しよう。①辺鄙で遠い地区が存在するため、効率的な伝承に困難性がある。②トンパ文字

の伝承教育が浸透していないため、「トンパ文字入り T シャツ」などの観光商品や看板などにおいて誤使用されるという誤った文化使用のケースが見られる⁸⁾。③ナシ族は雲南省のほか、四川省、チベットにも一万人余り存在する。行政地域別に、保護と伝承に関する政策も異なるため、トンパ文字・典籍を含めたトンパ文化の保護と伝承について統一的な政策が求められる。④トンパ文字・典籍の伝承において係る費用財源、教師の育成経費、教材の編成およびその費用の捻出等が十分ではない。⑤クラス伝承は仕事との両立の問題を含め、就職や進学などによって継続的な勉強や研究が続けられない。⑥クラス伝承は受講しても将来の大学進学や就職などを含め社会経済的恩恵を得るにむしろマイナスとなるとみなされることが多い。

3.4 トンパ文化保護の現状

3.3 より、現在トンパ文化直面している主な問題として6点を指摘したが、現地でのインタビュー調査の実施により⁹⁾、麗江の関連機関はそれぞれの役割を担いながらトンパ文化を保護していることが確認された。先記①の問題については、現在、麗江市教育局は農村学校でバイリンガル教育の実施し、有効な伝承措置を行っている。また、玉水寨旅遊集団は遠隔地区への道路などインフラ整備が整えているとともに農村の伝承基地に資金、施設の支持を行っている。さらに、トンパ文化研究院も「紙援トンパ」などの辺鄙で遠い地区での文化伝承を支持している。②の問題については、トンパ文化研究院は観光商品や看板などのトンパ文字を正しく使っているかどうかを審査し、またトンパ文字の使い方を商人に指導している。今後、関連機関と協力してトンパ文字の使用上の規範を守っていくつもりであるという。麗江市古城区文化広播新聞出版局もトンパ文字を正確に使用することを監督している。こうしたことによって現在では観光商品や看板などにおいてトンパ文字を誤使用される現象は減少している。玉水寨旅遊集団は「偽トンパ」を防ぐため、現地の政府にアドバイスして、「トンパ学位評定」と「トンパ身分認証制度」を設け、麗江市玉竜県政府とトンパ伝承院から認証したトンパに証書を授与している。③の問題については、玉水寨旅遊集団は「トンパ身分認証制度」を作ったが、麗江地域以外のトンパも参加希望があるため、統一的なトンパ身分認証制度を形成中である。また、玉水寨旅遊集団は毎年各地のトンパを招待し、「トンパ法会(祭司)」を開催している。第15回となる今年の「トンパ法会」は460人もの参加があった。④の問題については、教育局はトンパ文化の普及に力を入れている。トンパ文字の教材・CDなどの作成や、トンパ文化の宣伝教育などの措置を実行している。トンパ文化研究院はトンパ典籍の保護と普及のためトンパを招待して、研究員たちと10余りのトンパ経典を現代語に翻訳した。玉水寨旅遊集団は2011年にトンパ文化伝承学校を創立した。8歳から14歳の子供8名を募集して、現代知識とトンパ文化の両方を教育している。⑤の問題に関しては、トンパ文化に関する大学および大学院の課程を設け、進学ができるような体制を整えている。⑥の問題については、現在、観光産業の発展にしたがってトンパ文化に詳しい人材の需要も増加していること、また、認証されたトンパは玉水寨旅遊集団等からの寄付がもらえるなど状況の改善がみられる。

4. 非物質文化遺産の伝承と観光開発のインタラクションに関する考察

4.1 インタラクションの考え方

4.1.1 関連研究サーベイ

非物質文化遺産の保護・伝承と観光開発のインタラクションに関する代表的な考察として、李剛（2014）がある。彼は、観光開発は計画・開発・営業という一連の過程であると捉え、観光開発活動は非物質文化遺産の消失や復活に寄与し、保護と伝承に役に立つものの、一方で不適当または過度な開発は非物質文化遺産の価値と文化意義を壊す可能性があるとしている。また、「科学的な観光開発と持続的可能な非物質文化遺産保護のモデル」が最も望ましい開発方式であり、これを伝承主体、地方政府、関係企業、観光客などの関係主体間の衝突を回避しながら、良好なインタラクションとして作り上げるべきことを主張している。また、徐文燕（2010）は、中国内外で観光開発と非物質文化遺産をどのようにお互いに促進するかがテーマとなっており、国内の学者はいつも観光開発を保護の敵と見なし、両方の矛盾を強調しているが、海外の学者は非物質文化遺産には高い審美・文化・科学などの価値と特殊な吸引力があるとしている。ただし、開発においては保護性・特徴性・参与性・持続性と真正性などの原則を守るべきであると強調している（徐文燕 2010、9頁）。顔明霞（2014）は、非物質文化遺産の保護には資金上の困難があること、また非物質文化遺産の伝承・発展・イノベーションに結びつく観光資源開発を促進すべきことを指摘した上で、両者の良好な循環的發展のためには、観光資源開発によって非物質文化遺産の保護を促進するインタラクション・モデルと、非物質文化遺産の掘り起しによって観光資源開発を促進するインタラクション・モデルという2つのモデルを提示している。白馬偉色・黄榮華（2014）は、観光推進型都市化は中国特に西部の未発達地域における都市と農村の統合的發展の重要なモデルであるとして、生態環境を基層、固有の観光資源を2層、観光産業開発を3層とした“管制塔モデル”を麗江モデルとして考察している。このモデルは非物質文化遺産を含む2層と、基層である生態環境および3層である観光産業開発とのインタラクション・モデルと解釈することが可能であり、生態環境の許容力を踏まえながら、観光資源の活用と観光産業開発の推進を、地方經濟の發展、住民生活の向上、都市化のための基礎施設建設と結びつけ都市化していくことが重要であると主張している。

上記サーベイを踏まえ、非物質文化遺産と観光開発とのインタラクションをイメージしたのが図1である。ここに示すように、インタラクションにはプラス（ここでは以下、良好と記述）のインタラクションとマイナス（ここでは以下、不良と記述）のインタラクションという大きく2つの関係性があると考えられる。すなわち非物質文化遺産にとって観光開発は保護・伝承を促進する作用を有す反面、非物質文化遺産を消失・破壊する作用も有しており、正にもろ刃の剣であると捉える。このことは、既に消失したあるいは消失に瀕している非物質文化遺産を観光開発の力で復活あるいは活性化できることを意味する。一方、非物質文化遺産の過度な商品化など誤った利用は中長期的にみて観光開発に支障を来すばかりか非物質文化遺産そのものの内在価値や文化意義を低下させ、消失・破壊につながる

可能性もある。この点は非物質文化遺産が有している不復元性の性格からいって重大な問題といえよう。こうしたインタラクションを十分認識の上で非物質的文化遺産と観光開発の両立的発展を進める必要がある。

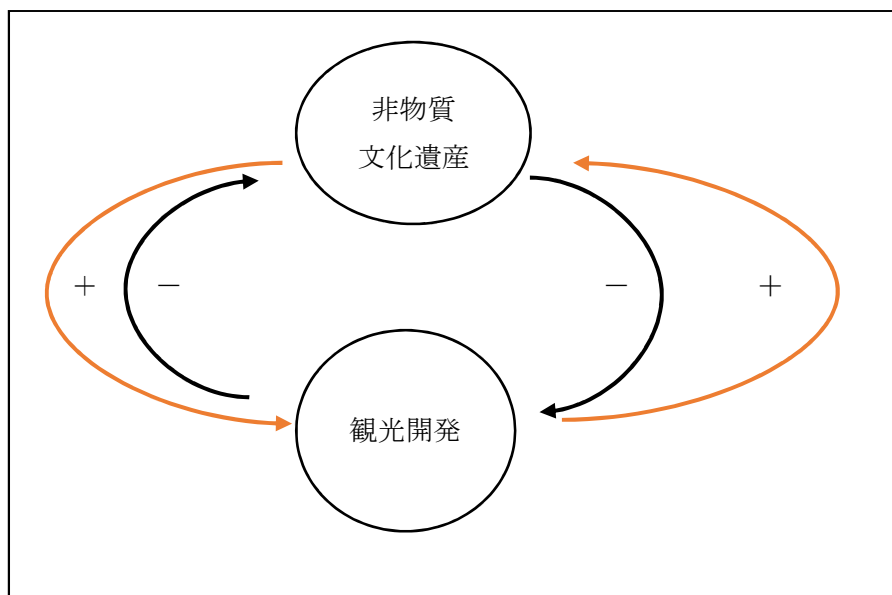


図1 非物質文化遺産と観光開発のインタラクション

4.1.2 良好なインタラクション

(1) 非物質文化遺産が観光開発を促進する作用

非物質文化遺産は独特な観光資源として観光開発を促進する。非物質文化遺産は特定の民族が特定の地域で培ってきた文化であり、魅力ある観光資源として表5に示す多様な観光価値をもたらす。また、非物質文化遺産はそのイノベーション的創造によって観光資源のレベルや多様性をもたらすことも可能であり、それを新たな観光資源や新たな観光商品に結びつけることを通じて一層の観光開発や観光ブランド化を促進しうる。非物質文化遺産は無形の文化遺産であり、モノとは違い人の価値を体現するとともに、人の創造力の投入によって進化していく側面も有している。こうした性格は非物質文化遺産が観光開発イノベーションを創造するパワーを内在化していることを意味するものであり、観光開発との相乗効果を生み出す可能性を有していると言えよう。なお、麗江市教育局と麗江市トンパ文化研究院は、インタビュー調査においてトンパ文化を伝承、保護することこそが麗江観光産業を持続的に発展させる要素のひとつであるとの主張であった。

表5 非物質文化遺産の観光価値

価値分類	具体的な価値の類別	非物質文化遺産の観光価値分類
歴史価値	考古価値、文化価値、精神価値	文化観光価値
	審美価値、観賞価値、認識	リゾート観光価値

	価値、実用価値	
	教化価値、社会価値	教育観光価値
時代価値	科学価値、知識価値	科学観光価値
	経済価値、再生価値	観光産業価値
	記念価値、収蔵価値	観光商品価値

出所：徐文燕（2010、10頁）より。

（2）観光開発が非物質文化遺産の保護・伝承を促進する作用

一方、観光開発もまた非物質文化遺産の保護・伝承に寄与する側面をもち、合理的に非物質文化遺産を利用、開発することは観光開発にとっても有効な手段の一つになる。すなわち、観光開発は既に消失したあるいは消失に瀕している非物質文化遺産を活性化する可能性を有している。観光開発による非物質文化遺産の保護・伝承への効果は大きく①広報・宣伝・認知効果、②心理的効果（アイデンティティ・誇りなど）、③産業経済への効果・資金効果、④環境整備への効果、などとして捉えることができよう。すなわち、①は、観光開発を通じて当該非物質文化遺産を広く広報・宣伝することは観光客や他地域の人々に広くその認知を高める効果である。②は、①を通じて当該非物質文化遺産に関わる人々にその重要性を確認させ、彼らのアイデンティティや誇りを自覚・向上させるとともに、非物質文化遺産の保護・伝承に積極的に係わりようとする意識を高める効果である。③は、観光開発が当該非物質文化遺産に関わるビジネス活動を行うことによって直接的・間接的に地域の諸産業への経済効果をもたらす効果である。④は、観光開発と非物質文化遺産の相互発展に伴い、交通・情報・環境・防災などの各種のインフラ基盤が整備・改善される効果である。なお、麗江市旅遊局は、インタビュー調査において観光開発はトンパ文化の経済価値を実現し、トンパ文化を保護する最も有効な方法であるとの主張であった。

4.1.3 不良なインタラクションとしての作用

観光開発は非物質文化遺産を保護・伝承する側面を有すると共に、非物質文化遺産を消失・破壊する危険性をも有している。この不良なインタラクションとしての作用として考え得るものには主に次の4つが考えられる。①過度な観光開発や誤った観光開発の進展は、非物質文化遺産を消失・破壊し、それをもはや観光開発に用いることさえ不能としてしまう恐れが存在する。②過度な観光開発や誤った観光開発の進展は、非物質文化遺産を担う人々のアイデンティティや誇りを失わせ、保護・伝承の文化を消失させる危険性が存在する。③過度な観光開発や誤った観光開発の進展は、地方政府、観光開発者、当地住民、観光客といったステークホルダー間の利益の相反を高める危険性がある。④過度な観光開発や誤った観光開発の進展は、自然環境の破壊を引き起こす危険性がある。

4.2 研究対象事例に関する考察

4.2.1 良好なインタラクション

研究対象地域麗江の現地アンケート調査¹⁰⁾によると文化伝承と観光開発がお互いに促進できると思う割合は90%以上を占める。また、現地インタビュー調査によると、行政も企業も共に非物質文化遺産（トンパ文化）の伝承、保護と麗江の観光開発とは緊密の関係があると考えている。トンパ文字・典籍伝承と観光開発との良好なインタラクションを考察した結果は以下のとおりである。

(1) 非物質文化遺産が観光開発を促進する作用の観点からみた良好なインタラクション

T シャツやキーホルダーなどの土産品などには既にトンパ文字が多く用いられている。また街路の看板や観光施設さらには道路標識などへの常時使用や祭事などの一時的使用に限らずあらゆる場面においてトンパ文の記載が多くみられる。このように麗江においては非物質文化遺産としてのトンパ文字を活用した観光資源が多く開発されており、トンパ文字は既に麗江の観光ブランドとなっている。もはや麗江においてトンパ文字抜きに観光を考えることは、魅力と特色を失うことを意味するものであり、土産品や入場・見学料など直接的な観光収入を減少させるばかりか麗江の街そのものの魅力までを失うことになりかねない。こうした点から非物質文化遺産としてのトンパ文字は麗江の既存産業に発展の機会を提供すると共に、新たな産業や雇用の創出ばかりでなく新たな産業構造への転換のための潜在的資源としても重要なインタラクション機能を有している⁹⁾。

また、今年(2015年8-9月)の現地インタビュー調査によると、麗江市教育局と麗江市トンパ文化研究院の主張は、トンパ文化が麗江観光産業の核であり、民族的、特色的な観光資源として、麗江観光産業の発展を促進するということであった。玉水寨旅遊集団は、トンパ文化を基礎として、「生態観光」だけではなく、「文化観光」を加えることでより持続的に観光開発を進んでいる。麗江トンパ紙坊はトンパ文化を中心として、トンパ紙を媒介として、様々な商品を作っており、トンパ文化の宣伝とビジネスとの両立、すなわちトンパ文化の有効活用による観光利益の獲得という実態がみられる。

(2) 観光開発が非物質文化遺産の保護・伝承を促進する作用の観点からみた良好なインタラクション

トンパ文字は本来、トンパ教のトンパが代々受け継いできたものであり、トンパの数が減ってきているという現象は必然的にトンパ文字の伝承が衰退化していくことを意味する。しかしながら世界遺産への登録など麗江における観光開発の隆盛は、トンパ文字をはじめとするトンパ文化の保護・伝承の再認識を呼び起こした面が少なからずみられた。すなわち観光商品や街並みの形成という観光開発に関わる活動においてトンパ文字の使用は欠かせないものであり、そのオーセンティシティ（真正性）を確保するためには、トンパ文字の保護・伝承がどうしても必要となる。トンパ文字のように日常生活や人生設計において必要性の高くないと認識されている非物質文化遺産の保護・伝承を推進するためには、観光開発との結びつきを強めることが重要である。

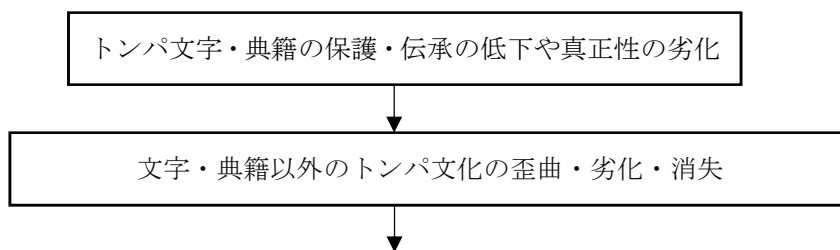
こうした観点から麗江市旅遊局は観光収入を利用して、麗江の交通、環境等のインフラ整備を改善している。また、観光客に一人80元の「古城保護費」を徴収し、それを資金と

して古城の保護、修復、トンパ文化の保護、伝承に投入している¹²⁾。また、玉水寨旅遊集団は観光収入の一部分をトンパ育成およびトンパ基地の設立等の事業に投入している。

4.2.2 不良なインタラクションについての考察

麗江のトンパ文字・典籍伝承と観光開発との不良なインタラクションとして考えられるのは、過度な商業主義の影響からトンパ文字の誤用による観光商品が顕在化していることである。これらの発生に関しては、デザインを重視した「二次市場」¹³⁾の意義も考慮すべきではあるが、トンパ文化の根幹であるトンパ文字・典籍の伝承の重要性に鑑みると座視しえない問題といわざるをえない。トンパ文字を十分理解せずに観光商品化を図ることの是非は難しい問題を内在しているが、少なくとも使用された文字が適正なトンパ文字なのか、それともデザインのみに着目した誤ったトンパ文字の使用であるのかを消費者も判別できる状態で販売することが望ましいように思われる。トンパ文字の真正性をどういった範疇で確保するかは、トンパ文字の保護・伝承の推進において根幹的な課題といえよう。

このように、トンパ文字の保護・伝承と観光開発との不良のインタラクションは、観光商品面に如実にあらわれているが、トンパ文字がトンパ文化の根幹的要素であることを鑑みるとトンパ文字伝承の低下や真正性の劣化は、トンパ文化全般の理解度・浸透度の低下を招かざるとえないと考えられる。すなわち、「トンパ文字・典籍の伝承の低下や真正性の劣化」→「文字・典籍以外のトンパ文化の歪曲・劣化・消失」→「トンパ文化が有していた“重文軽商”・自然との調和・民族のアイデンティティに関する意識の弱体化」という連鎖である。現在、麗江の古城区を中心にみられる「過度な商業主義の浸透」、「環境汚染や玉龍雪山をも含む自然生態系の破壊¹⁴⁾(牛 2013:273 頁、和 2013:114 頁、趙・殷 2013:168 頁、李・張 2010:73 頁、黄 2013:25 頁)」は、そうしたトンパ文化全般の理解度・浸透度の低下と捉えるだけでなく、それらの根幹に位置するトンパ文字・典籍そのものの保護・伝承の不十分性にも原因の基盤があるように思われる。こうした連鎖は非物質文化遺産と観光開発とのインタラクションにいわゆる悪循環をもたらすのであり、外来文化と結びつきのナシ族の道徳観・価値観の変化(程・肖 2012:164 頁)、ナシ族の伝統文化の世俗化とトンパ文化を保護・伝承しようとする意識の低下(程・肖 2012:164-165 頁、和 2014:114 頁、趙・殷 2013:168 頁、黄 2013:27 頁)、漢民族など外来人の流入とナシ族の古城区からの転出¹⁵⁾(李・張 2010:72 頁、黄 2013:27 頁、墨 2013)といった事態はその顕在化と認識しえよう。こうした不良なインタラクションが発生する原因連鎖のメカニズムを単純化して示したのが図2である。



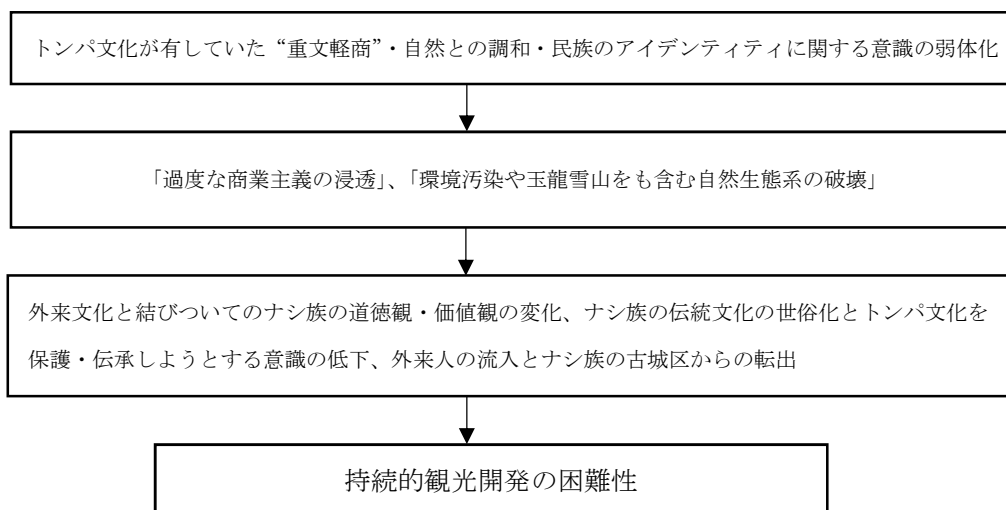


図2 不良なインタラクションの原因連鎖と持続的観光開発との関係性

また、現地インタビュー調査より、5つの関係機関もトンパ文化と観光開発のインタラクションにおける問題を指摘した。その結果を示したのが表6である。

表6 現地インタビュー調査より不良なインタラクション

機関	不良なインタラクション
教育局	<ul style="list-style-type: none"> ・ 伝統文化の認識問題 ・ 資金投入問題 ・ トンパ文化利用の規範性問題 ・ 教育の継続性問題。
旅遊局	<ul style="list-style-type: none"> ・ 文化の真正性。 ・ 外来文化の影響。 ・ 文化の悪用。 ・ 自然環境の破壊。
トンパ文化研究院	<ul style="list-style-type: none"> ・ トンパ文化の悪用。 ・ 伝承人の経済収入問題。 ・ 伝承基地の分散
文広局	<ul style="list-style-type: none"> ・ 文化の真正性。 ・ 外来文化の影響。 ・ 文化の悪用。 ・ 伝承人の減少。 ・ 公的資金の不足問題。 ・ 政策の具体化における問題。
玉水寨旅遊集団	<ul style="list-style-type: none"> ・ トンパ文化の悪用。 ・ 自然環境の破壊

もちろんこうした不良なインタラクション作用の原因が全てトンパ文化の劣化に起因するとみなすわけにはいかない。またそうした原因連鎖は本来、単線的な単純な構造では捉えきれない複雑なものである。しかしながら、麗江が長年安定的な地域社会を培ってきたという事実は、伝統的トンパ文化に持続可能性を促進する基礎力があることを証明している。麗江を取り巻く急激な社会環境変化があったとしても、地域の固有性との適度な調和なくして持続可能な観光開発および地域発展は困難であることはこうした不良なインタラクションによって検証されていると考えられよう。

4.2.3 不良なインタラクションの改善に向けた考察

持続的観光開発を志向するためには、上記で考察した不良なインタラクションの改善が求められる。以下、改善に向けた基本方針と具体的な改善方策について考察する。

(1) 改善に向けた基本方針

不良なインタラクションが発生する原因連鎖を考慮するならば、持続的観光開発を志向するためにはトンパ文字・典籍の保護・伝承を強化するシステムの追及のみでは、十分な成果を得ることは困難と思われる。不良なインタラクションを良好なインタラクションへと転換させるためには、図3に示すように転換を促す支援システムの整備が必要であり、両方のシステムが緊密に結びつき相乗効果を生じさせる必要がある。

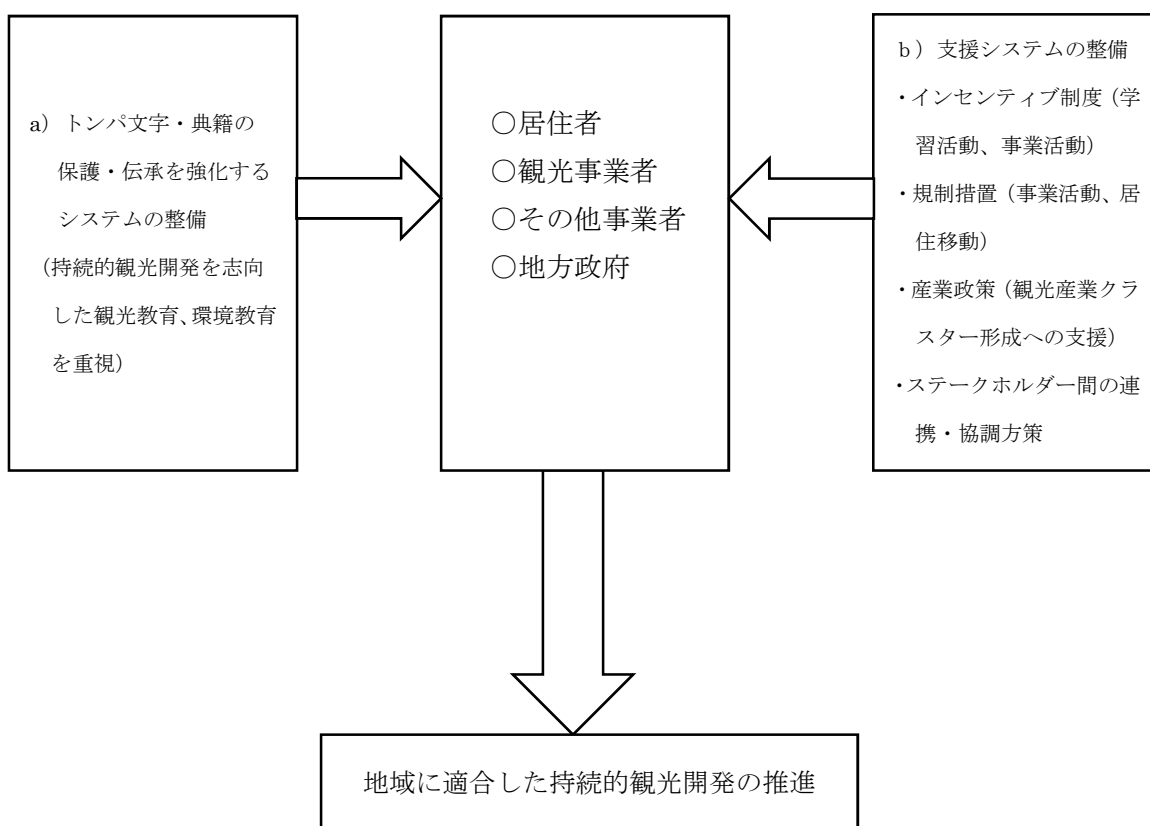


図3 不良なインタラクションの改善システム

(2) 改善方策

a) トンパ文字・典籍の保護・伝承の強化システム

トンパ文字・典籍の保護・伝承の強化システムを構築することによって以下の改善を図っていく。第一に、トンパ文字伝承の低下や真正性の劣化を防ぐことによって過度な商業主義を抑制する意識を涵養していく。トンパ文化には“重文軽商”の認識が存在する。トンパ文字・典籍を学習することを通じて現代経済を再認識することは持続的観光開発を志向する上で重要である。第二に、トンパ文化思想の中心には「人間と自然は兄弟だ」という認識が存在する。トンパ文化思想は人が自然を尊敬・保護する意識を培うことに積極的な意味がある。それゆえ、トンパ文字・典籍を学習することを通じて自然生態環境の保護意識を高めることは持続的観光開発を志向する上で重要である。第三に、トンパ文字・典籍を学習することを通じてナシ族のアイデンティティ（民族意識の共有）を確認し、観光資源としてのトンパ文化を保護・伝承していく基盤を維持していくことは、重要な固有観光資源を守り、持続的観光開発を志向する上で重要である。第四に、トンパ文字・典籍の保護・伝承システムをナシ族だけではなく、ナシ族以外の民族および外来人にまで広げることが重要である。現在の麗江においては当地住民に向けたトンパ文化の教育事業が進んでいるものの、外来人向けの伝統文化教育はほとんどない。1997年、麗江古城が世界文化遺産に登録されて以来、古城では急激に店舗が増加し、その中で働く外来人も増加した結果、現在では古城の中で働いている者は当地住民より外来人の方が多いう状況である。これに伴いトンパ文化を伝播する中心地区で働く者がトンパ文化を理解していないという問題が生じている¹⁶⁾。それはまた麗江の民俗、生活習慣、伝統文化を尊重しない気風をもたらすことにもつながる。トンパ文化の根幹であるトンパ文字・典籍を学習しようとする外来人のために学習のシステムの構築が必要であり、外来人までを包括した麗江住民全てを範疇とするトンパ文字・典籍の保護・伝承システムの構築は、持続的観光開発を志向する上で重要である。

b) 支援システム

i) インセンティブ制度

トンパ文字・典籍の保護・伝承の強化システムを構築することによって持続的観光開発を志向しようとしてもトンパ文字・典籍の学習の必要性が弱くは、成果を期待できない。トンパ文字・典籍を含むトンパ文化はナシ族にみられるトンパ教に由来するものであり、実際の生活とは密接なつながりがない。したがって豊かな人生を過ごそうと考えるならばあえてトンパ文字・典籍を学習するよりも漢語（普通語）を通じて現代知識を蓄積しようとすることは当然の行動である。こうした状況の中でトンパ文字・典籍の保護・伝承の強化システムを構築するためには、その活用が実際の生活や人生において有意義であることを保障する措置が政府を中心にインセンティブ方策として制度化されていなければならない¹⁷⁾。例えばトンパ文字・典籍を学習し、一定の成績を上げた者には奨学金の提供や優先的な就職斡旋を行う。また、トンパ文字・典籍を学習し、一定の成績を上げ、トンパ文字ならびにトンパ文化の正しい使用によって観光商品を販売している観光事業者に対しては、

優良店の認証、文化伝承奨励金などの補助金や各種税の減免措置などの特典を与える方策が有効であろう。

ii) 規制措置

インセンティブ方策とあわせて政府による規制も重要である。現在、麗江では過度な開発と過剰な観光客入込み数によって重要な観光資源である自然生態環境の破壊が進行している。その保全のためには、環境許容力（キャリング・キャパシティ）を十分考慮に入れた科学的観光開発を、政府が規制措置を中心として厳しく実行していくことが重要であり、トンパ文字・典籍の学習の観点からは、自然との調和を重視したトンパ文化の精神を再認識するとともに、それを模範的に実践する組織・人（事業者、地元住民）に対して、表彰や各種優遇措置（事業者であれば税の減免措置なども）を適用するなどの方策を考えるべきであろう。こうした一方で、重要な観光資源である自然生態環境の破壊や、トンパ文字ならびにトンパ文化の使用に問題が見られる組織（観光事業者、その他事業者）には罰則金を課すなど管理強化の実施が必要である（なお、得られた罰則金などはインセンティブを付与するための資金や、緑化・汚水処理・ごみ処理、さらに新エネルギーの開発など自然生態環境の保全・有効利用などに充てることによって循環的に活用することが望ましい）。また、人口置換の問題への規制も重要である。2000年の麗江古城ではナシ族を主体とする常住人口による店舗経営が全体の5割に近かったが、観光地化が進んだ2004年では、わずか3割にまで落ち込み、世界遺産登録によって生じた観光客の増加に乗じて流入した新たな人口は6割近くとなった。こうした背景には暫住証による短期的経済利益追求が根源にあるとも言われるが¹⁹⁾、トンパ文字・典籍の保護・伝承の担う中心主体であるナシ族住民が空間的観光資源の中心を失う事態を看過すべきではなく、持続的観光開発を志向するためには外来人の流入規制やナシ族住民の古城空間における定着化・再流入化のための規制を検討・実施していく必要がある。

iii) 産業政策

持続的観光開発を志向する場合、ボトル・ネックになり易いのは経済的収入が低下することへの懸念である。麗江においては、ナシ族住民を主体として元々展開されていた農業と地元外からの人々による観光・サービス業が産業の中心となっている。世界遺産の認定によって国内外の観光客が急増したため、観光・サービス業および不動産業が急速に成長したことは一時的な経済現象として必然的な結果である。問題は麗江が地域の長期的な安定・発展を続けていくために必要な持続的観光開発へと転換していく過程で懸念される経済収入の低下をどのように払拭していくかである。経済的に重要であるのは単線的な観光開発依存型経済ではなく、農業や皮革業など地元産業の高付加価値化や新たな企業創造を含めた産業構造の高度化を、観光ビジネスを活用しつつ推進していくイノベーションが求められる。地元の固有性を重視した食材の多様化・高品質化、加工食品化、化学・医療への応用、皮革製品におけるデザイン力強化・高品質化など具体的には極めて多様な展開が考えられよう。要は地元開発者の工夫次第である。地元政府はこうした地域経済力の強化に結びつく支援を強力に実施し、持続的観光開発の志向と適合した将来的経済基盤として

観光産業クラスターの形成を迫及していく必要がある。また、これとあわせてナシ族住民のビジネスへの参加を促す措置・教育も必要である。トンパ文字・典籍を含むトンパ文化の保護者および伝承者であるナシ族住民は、漢民族に比較して相対的に市場競争力が弱く、自らの文化遺産を商品化・産業化していくプロセスにおいて主体性を十分に発揮できていない。したがって、彼らのビジネス・マインドを喚起する教育を実施するほか、古城における土産店やトンパ工芸品の製作・販売に関して優先的な許可を行うなど支援システムの整備が必要である。

iv) ステークホルダー間の連携・協調方策

持続的観光開発の実現のためには麗江におけるステークホルダー間の利益相反に過度な問題が生じないように配慮していかなければならない。トンパ文字・典籍の保護・伝承を根幹としたトンパ文化と観光開発との両立可能性を高めるには、各ステークホルダーがそれぞれの立場からその重要性を理解しなければならない。民族や社会的立場を越えて持続的観光開発を推進していくためには、ステークホルダーの垣根を越えた地域社会におけるコンセンサスの形成が必要であり、地方政府による施策の展開を中心に各ステークホルダーが一致連携・協調しあう努力が必要である。

5. おわりに

本稿では非物質文化遺産と観光開発とのインタラクションにおける課題と両立可能性を中国雲南省麗江市のトンパ文字・典籍の保護・伝承と観光開発を事例に考察した。本稿は文献研究と現地インタビュー調査、現地アンケート調査との統合によって考察したものである。これより、非物質文化遺産の保護・伝承と観光開発の間には、一般的に良好と不良の2つのインタラクションが存在すること、また事例を通じてどのような良好と不良なインタラクションが生じているのかを明らかにした。その上で、不良なインタラクションを良好なインタラクションへと転換・改善するために必要な基本方針とその下での改善方策を考察・提示した。残された課題は、これまでの観光学分野では未構築となっている文化遺産の保護・伝承と持続的観光開発に関する新たな理論的なフレームワークを構築し、考察結果をさらに再吟味することである。

注

- 1) 「雲南省は中国の中でも有数の多民族地帯であると同時に、最も多様な少数民族と出会う場でもある」(松村 2001)
- 2) 西田はトンパ文字の原型と考えられるモソ文字に関して次のように言及している。「若喀文字がおそらく、モソ象形文字のもっとも古い形ではないにしても、かなり古い形態をとどめているものと考えてさしつかえない。しかし、この文字が作られた年代は、ただ唐以後(618~)、明以前(~1368)と限定できるのみで、今の研究段階では、詳しいことはよくわからない」(西田龍雄『生きている象形文字』、28頁、五月書房、2001年)。また、和秀梅は、トンパ文字が生まれたのはおよそ11世紀以前であることおよび、西田龍雄がトンパ文字は漢語およびチベット語を継承しているもののトンパ文字独自の特徴も有

- していると言及していることを記述している（和秀梅（2010：83-84頁））。
- 3) 董・施・姜（2013）を参照されたい。
 - 4) UNESCO(英) <http://unesdoc.unesco.org/>を参照されたい。
 - 5) 麗江東巴文化博物館の麗江納西東巴文化学校：7期の学生は毎日10元の手当てが支給された。また9期の学生は月30元が生活費として支給された（高茜 2005、301-302頁）。
 - 6) 和継全（2012：14頁）。
 - 7) 楊傑宏（2013：153頁）。
 - 8) 「トンパ焼き魚」「トンパ・ソーセージ」「トンパマッサージ」「トンパ・フットケアサロン」「トンパ靴磨き」、などトンパ文化をむやみに使うケースも出てきたことが指摘されている（徐江帆ほか 2013：9頁）。
 - 9) インタビュー調査の概要については付録-1を参照されたい。
 - 10) アンケート調査の概要については付録-2を参照されたい。
 - 11) 中国人民代表大会国宴会において用いられた麗江の「雪桃」もそうした具体例の一つといえよう
 - 12) しかしながら、「古城維持費」を巡っては徴収の意義・方法などに関して最近、国家政府から見直しの指示が出されている（人民政協網 2015年10月30日のサイト）。
 - 13) 山村（2003）を参照されたい。
 - 14) 麗江大研古城の水源地黒竜潭公園は2012年1月から2014年9月まで、956日干上がった。また、観光会社過度の開発と多すぎる観光客の登ることによって、玉龍雪山の雪線もだんだんあがることになってしまった。
 - 15) 墨によると古城区からのナシ族の転出の原因は、①生産方式の変化、②生活コストの上昇、③収入リスク、④発展不均衡、⑤規制・制度の改変、⑥居住環境の変化（ビジネス・喧噪・汚染など）が指摘されている（墨 2013：3～5頁）
 - 16) 趙学梅（2013）を参照されたい。
 - 17) スロスビーは次のように指摘している「政府の政策は政府によって所有される文化資本を管理することであり、民間が所有する遺産の管理を監督することである。遺産の管理を分析する適切な政策枠組みは持続可能な発展、再び自然資本との関連を生かすことができる（デイヴィッド・スロスビー（2014：129頁））」。
 - 18) 山村（2003）を参照されたい。

引用文献

（中国語文献）

- 白馬偉色・黄栄華「西部欠發達地区旅游駆動型城鎮化模式探析」『雲南農業大学学報』、2014年第5期、45-49頁。
- 程金虎・肖継彩「麗江旅游開發中的民族文化及其保護」『芸術文化交流』、2012年09月下旬刊、164-165頁。
- 董培海・施江义・姜太芹「西部县域旅游經濟發展的路径選擇研究—從‘麗江模式’到‘騰衝現象’」、2013年、58-63頁。

- 和繼全「民族伝統文化的課堂伝承模式——基于纳西東巴典籍教学伝承の案例」『教育學術月刊』、2012年、14-16頁
- 和力民「試論東巴文化的伝承」『雲南社会科学』、2004年第1期、83-87頁。
- 和秀梅「納西東巴文字研究概況」『吉林省教育学院学報』、2010年第4期、83-84頁。
- 胡迪雅「文化瀕危与教育——東巴文化伝承變遷的教育学分析」『民族教育研究』、2013年第5期、58-62頁。
- 黃敏「旅游給麗江古城帶來的負面影響研究」『旅游縱覽』、2013年2月下半月、26-26頁。
- 李超・張兵「“麗江模式”欠陥的探討」『昆明理工大学学报(社会科学版)』、第10卷第5期、2010年、71-75頁。
- 李鋼「非物質文化遺產保護与旅游開發的互動關係研究」『大理学院学報』、2014年第13卷第5期、13-16頁
- 李四玉「論東巴文化伝承の功能」『怀化学院学報』、2014年第33卷第10期、19-22頁。
- 墨紹山「歷史城鎮人口置換問題研究—基於雲南麗江古城的再思考」『經濟地理』、第33卷第11期、2013年、1-6頁。
- 牛紅玉「麗江旅游業發展存在的問題研究」『現代經濟信息』、2013年第9期、273-274頁。
- 王声躍・嚴舒紅「東巴文化旅游項目開發与可持續開發」『玉溪師範学院学報』、2001年第17卷第2期、31-37頁。
- 徐江帆・劉清龍・張碩楠「旅遊循環經濟視野下的麗江可持續發展研究」『學園』、2013年20期、8-11頁。
- 徐文燕「旅游開發对非物質文化遺產保護的適用性研究」『旅游研究』、2010年第2卷第4期、9-15頁。
- 楊傑宏・張玉琴「東巴文化在学校伝承現狀調查与研究」、2009年、79-86頁。
- 楊傑宏「多元互動中的旅游展演与民俗變異——以麗江東巴文化為例」『民俗研究』、2013年第2期 147-154頁。
- 顏明霞「非物質文化遺產保護与旅游資源開發的互動發展模式研究」『創新』、2014年第8卷第3期、61-64頁。
- 楊世英・楊世榮「初探東巴文化在麗江旅游業中的伝承思路」『城市旅游規画』、2014年6月刊 204-205頁。
- 趙悦・石美玉「非物質文化遺產旅游發展中的三大矛盾探析」『旅遊學刊』、2013年第20卷第9期、84-93頁。
- 趙志霞・殷紅衛「城市旅游發展戰略探析——以麗江為例」『經濟研究導刊』、2013年第1期、167-169頁。

(日本語文献)

- 高茜「中国麗江納西族における東巴文字復興運動—1990年代以降を中心に—」『国立民族学博物館研究報告』、2005年30巻2号、279-326頁。
- 西田龍雄『生きている象形文字』、28頁、五月書房、2001年。

スロスビー、ディヴィッド（後藤和子・坂本崇：訳）『文化政策の経済学』、ミネルヴァ書房、2014年、129頁。

山村高淑「ツーリスト・アートの創出と文化遺産の継承」『京都嵯峨芸術大学紀要』、第28号、2003年、1-14頁。

（英語文献）

Huibin, Xin., Azizan Marzuki and Arman Abduk Razak(2012), Protective Development of Cultural Heritage Tourism : The Case of Lijiang , China, Theoretical and Empirical Research in Urban Management, Vol. 7, Issue 1, pp. 39-54.

引用サイト

趙学梅「世界文化遺産麗江古城原住民与外来商戸的調査報告：麗江古城打工者状況調査報告」『麗江文化』、2013年第4期（頁の記載無し）（<http://www.ljgc.gov.cn/whsq/858.htm> : 2015年7月21日アクセス）。

人民政協網「麗江被列入旅遊局“黑名单” 最新整改方案出炉」

（http://www.rmzxb.com.cn/sy/jrdt/2015/10/19/599694_1.shtml、2015年10月30日参照）。

謝辞：本研究を行うにあたり、インタビュー調査にご協力いただいた麗江市教育局、麗江市旅遊局、トンパ文化研究院、麗江市古城区文化広播新聞出版局、麗江玉水寨旅遊集団とアンケート調査にご協力いただいた麗江市民族中等專業学校、雲南大学旅遊文化学院、観光産業に勤める事業者の各機関と各団体の皆様のご厚意に深く感謝の意を表します。

付録—1 インタビュー調査の概要

機関	調査日	対応者	調査質問項目
麗江市教育局	8月27日	基礎教育科科长 Z 氏 基礎教育科課 H 氏	「非物質文化遺産の保護・伝承と観光開発との関係」 「非物質文化遺産の保護・伝承と観光開発間の問題」 「非物質文化遺産の保護・伝承と観光開発両立可能性と両立ための措置」「トンパ文化の役割」「利益関係者の関係」「トンパ文化伝承の現状」「トンパ文化普及の困難性」
麗江市旅遊局	8月27日	旅遊局調研員 W 氏 旅遊局事務室主任 W 氏 旅遊協会秘書長 L 氏	「非物質文化遺産の保護・伝承と観光開発との関係」 「非物質文化遺産の保護・伝承と観光開発間の問題」 「非物質文化遺産の保護・伝承と観光開発両立可能性と両立ための措置」「トンパ文化の役割」「利益関係者の関係」「トンパ文化の伝承にとって観光産業の役割」「今後観光産業発展の計画」
トンパ文化研究院	8月28日	院長 L 氏	「非物質文化遺産の保護・伝承と観光開発との関係」 「非物質文化遺産の保護・伝承と観光開発間の問題」 「非物質文化遺産の保護・伝承と観光開発両立可能性と両立ための措置」「トンパ文化の役割」「利益関係者の関係」 「トンパ文化伝承の現状」「トンパ文化普及の困難性」 「観光産業の発展に伴うトンパ文化伝承の変化」
麗江市古城区文化 広播新聞出版局	9月1日	局長 W 氏 トンパ紙坊社長 X 氏 麗江市古城区非物質文化遺産保護管理センター主任 C 氏	「非物質文化遺産の保護・伝承と観光開発との関係」 「非物質文化遺産の保護・伝承と観光開発間の問題」 「非物質文化遺産の保護・伝承と観光開発両立可能性と両立ための措置」「トンパ文化の役割」「利益関係者の関係」「トンパ文化の伝承についての観光産業の役割」
麗江玉水寨旅遊集團	9月2日	副社長:姜麗慶	「非物質文化遺産の保護・伝承と観光開発との関係」 「非物質文化遺産の保護・伝承と観光開発間の問題」 「非物質文化遺産の保護・伝承と観光開発両立可能性と両立ための措置」「トンパ文化の役割」「利益関係者の関係」「トンパ文化の伝承についての観光産業の役割」「観光産業の発展に伴うトンパ文化伝承の変化」

